

オフィクレイド教則本の比較研究

著者	橋本 晋哉
雑誌名	洗足論叢
号	49
ページ	27-37
発行年	2021-02-01
ISSN	2433-9237
URL	http://id.nii.ac.jp/1493/00001928/



オフィクレイド教則本の比較研究

A Comparative Study of "Méthode d'Ophicléide"

橋本晋哉

Shinya Hashimoto

1 はじめに

オフィクレイド (Ophicléide)¹ は19世紀フランスにおいて発明された低音金管楽器である。現在使用されている多くの金管楽器と異なり、管体に空けられた音孔をキイの操作で開閉することによって音程の操作を行う。近年、古楽の研究と演奏実践がロマン派、近代の時代も対象とするに至って、オフィクレイドが用いられる機会も次第に増加している。楽器については、当時の楽器のレストアが一般的ではあるものの、現代のメーカーによってコピーが製作、販売され、日本国内でも入手が容易になりつつある。

しかしながら、そのようなハードウェアの充実が図られる一方、メソッドやエチュード、ソロ曲などのソフトウェアに関しては後追いとなっている。オフィクレイドの場合は、そのフィンガリングが特殊であることもあって、演奏法修得の初期段階の情報は特に必要とされている。一方、インターネット上のデジタル・アーカイヴの充実もあって、国際楽譜ライブラリープロジェクト (International Music Score Library Project, IMSLP)² 上から多くのオフィクレイドの教則本を入手することが可能となった。本稿では、IMSLP から入手可能な教則本に加えて、フランス国立図書館 (Bibliothèque nationale de France, BnF)³ 所蔵のものも加えた、19世紀フランスの教則本について、全体的な傾向、個別の特徴を比較検討し、さらに修得に当たってそれらをどのように活用するかを考察したい。尚、音高の記述は科学的ピッチ表記法 (SPN) を用い、A4=440Hz とする。

2 オフィクレイドの歴史

2-1 オフィクレイド前史

オフィクレイドは前述のように19世紀フランスにおいて広く用いられた楽器であるが、この楽器が登場するにあたって、2種類の楽器が大きな影響を与えている。

2-1-1 セルパン

セルパン (Serpent) は、16世紀末から19世紀にかけて、フランスを中心にヨーロッパで用いられた木製の低音管楽器である⁴。この楽器は、発音は現代のトランペットやトロンボーンと同じく唇の振

動（リップ・リード）でありながら、音高の制御にはリコーダーと同じように指で直接音孔を開閉する方法を採る。17世紀から18世紀全般にかけて、フランスの教会では単旋聖歌の伴奏として、セルパンが広く用いられた。18世紀後半からは軍楽隊のバス楽器として採用され、19世紀に入って音量増加のための改良や音程補正のキイの追加、構え方の変化などの点から多くの派生型が生まれた。ここからセルパンは従来の「教会のセルパン（Serpent d'église）」と派生型の「軍隊のセルパン（Serpent militaire）」といった呼称で二分される。

2-1-2 キイ・ビューグル

キイ・ビューグル（Keyed bugle）⁵ は円錐形のベルを持つソプラノの音域の金管楽器で、従来の単管ビューグルの管体に音孔を開け、木管楽器と同じように5から12のキイで開閉をコントロールする機構が追加されている。この楽器は1810年にダブリンのジョセフ・ハリデイ（Joseph Haliday, c1772-1827）が特許を取得し、19世紀初頭のイギリスではオーケストラ、軍楽隊において広く用いられていた。当時の有名なキイ・ビューグル奏者として、ジョン・ディステイン（John Distin, 1798-1863）が挙げられる。

2-2 オフィクレイドの歴史

ロシアのコンスタンチン大公（Constantine Pavlovich, 1779-1831）は、ディステインが擲弾兵音楽隊（Grenadier Guards Band）でキイ・ビューグルを演奏しているのを聴き、パリの管楽器メーカー、アラリ（Halary）のジャン・イレル・アステ（Jean Hilaire Asté, 1775-1840）にこの楽器の複製を依頼する⁶。1817年頃、アラリは7つのキイを持つビューグル「クラヴィチューブ（Clavitube）」、9或いは10のキイを持つアルトもしくはバスのビューグル「カンティックラーヴ（Quinticlave）」、そして7或いは9のキイを持つバスの楽器として「オフィクレイド」を開発し、1821年に特許を取得した（カンティックラーヴはアルト・オフィクレイドとも呼ばれる）⁷。

「オフィクレイド」という言葉は、ギリシャ語の「ὄφις（ophis：蛇）」「κλεις（kleis：鍵）」に由来し、「キイ付きのセルパン」を意味する⁸。この楽器が最初に用いられたのはガスパーレ・スポンティーニ（Gaspere Spontini, 1774-1851）の1817年の歌劇《オランピア（L'Olimpie）》で⁹、その後ベルリオーズ《幻想交響曲》（1830）、ワーグナー《さまよえるオランダ人》（1842）、メンデルスゾーン《エリア》（1846）、シューマン《ゲノフェーフア》（1849）など、多くの作曲家がこの楽器を用いている。有名な奏者としては、ヴィクトル・コシヌス（Victor Caussin, 1806-1900）、サミュエル・ヒューズ（Samuel Hughes, 1825-c1895）¹⁰ 等が挙げられる。19世紀中期までにオーケストラや軍楽隊で広く用いられていたが、同時期に発明されたピストンバルブ、ロータリーバルブなどの機構を持つ、チューバに代表される金管楽器の使用が1870年頃から次第に優勢となった。ヨーロッパ以外では、南北戦争期のアメリカ¹¹、ラテン・アメリカの初期のオルケスタ・ティピカ¹²（Orquesta Tipica）などでもオフィクレイドが用いられていた。

3 オフィクレイドの教則本

3-1 軍楽学校

19世紀初頭、フランスでの音楽教育は1795年創立の音楽院（Conservatoire de Musique: 現在のパリ国立高等音楽院）が担っていたが、1836年、軍楽隊の隊員養成のために「軍楽学校」（Gymnase musical militaire）が別途設立される¹³。ここでの目的は、隊員が2年間にわたって楽器の技術を向上させ、合奏やオーケストラの指揮を学ぶことであった。初年度はソルフェージュと和声、クラリネット、フルート、オーボエ、ファゴット、トランペット、ホルン、オフィクレイド、トロンボーンのクラスが設けられ¹⁴、オフィクレイドのクラスは前述のヴィクトル・コシヌスが担当している。各歩兵連隊の兵士は「ここでメソッドや近代的なスタイルを学び、それらを軍隊に戻って普及していく」ことになっていた¹⁵。1856年にはこの軍楽学校は廃止され、音楽院に再び軍楽隊員のための特別クラスが設けられた。この際オフィクレイドのクラスはサクソルンへと置き換えられたが、1870年にこの特別クラスも廃止されている。

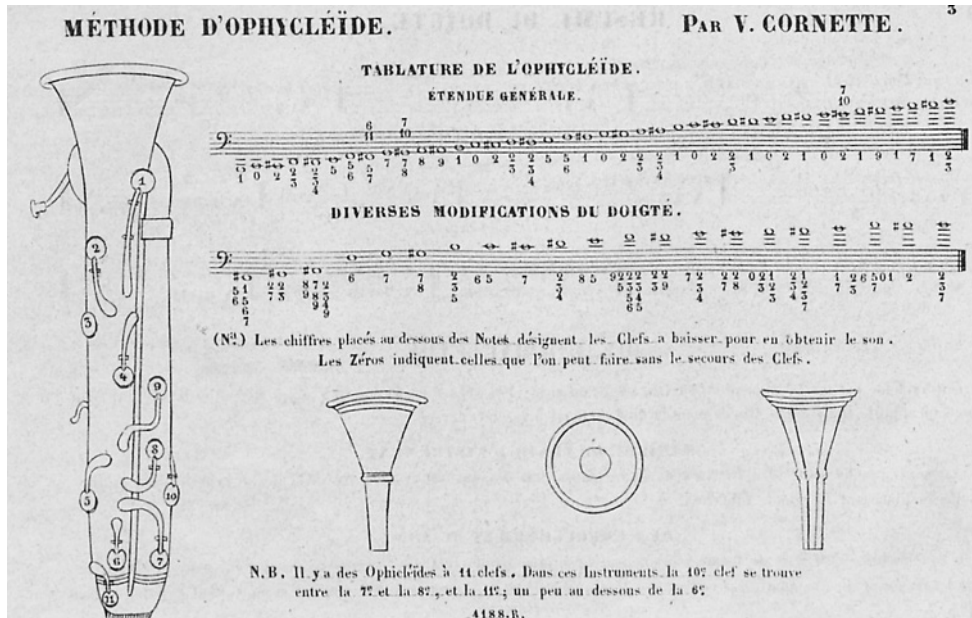
3-2 オフィクレイドの教則本の概要

本稿を執筆した2020年8月現在、国際楽譜ライブラリープロジェクトとフランス国立図書館には、ダウンロード可能なオフィクレイドの教則本が計20冊所蔵されている。各教則本の出版年については、フランス国立図書館の所蔵データを参照し、そちらに記載のないものについては国際楽譜ライブラリープロジェクトの記述を採用している。年代別に見ると1820年代が1冊、30年代：2冊、40年代：7冊、50年代：1冊、60年代：5冊、70年代：2冊、年代不明：2冊であった¹⁶。ページ数としては最も少ないもので20ページ、多いものでは2分冊で計191ページである。その殆どが全くの音楽初心者から上級者までを対象としたもので、基礎的な楽典（五線譜の読み方から、音符・休符の種類、拍子、リズム、音楽用語）などを扱い、続いて楽器の構え方（図1¹⁷）、マウスピースについて、そして運指表（図2¹⁸）などが掲載されている。初歩的な発音の練習の後、跳躍音程、長調、短調の音階を経て、オペラのアリアからの抜粋などのソロのエチュード、最後に様々な難易度のデュオ、といった構成が一般的である。以降、出版年代順に特徴的な10冊の教則本について個別に挙げる。

図1 楽器の構え方の例



図2 オフィクレイドの運指表、マウスピース



3-3 各教則本の特徴

3-3-1 ゴベール『アルト・オフィクレイド教則本』、『バス・オフィクレイド教則本』(1825ca)

本稿の中では最も古い教本で、オフィクレイドを製作したアラリによって出版されている。著者は衛兵第1連隊トランペット奏者アントワヌ・フランソワ・ゴベール (Antoine François Gobert, 1767-1843) で、ナチュラル・トランペット、キイ・ビューグル、アルト・オフィクレイド、バス・オフィクレイドの総合教本となっており、アルト・オフィクレイドは第五部、バス・オフィクレイドは第六部が充てられている。第六部の前文で、アラリがコントラバス・オフィクレイドを開発したことが言及されている。運指表による音域はアルトがEb3-G6、バスがB1-C5。

3-3-2 コルネット『アルトとバスのオフィクレイド教則本』(1835)

作曲家ヴィクトル・コルネット (Victor Cornette, 1795-1868) による教本。1865年同著者による『オフィクレイド教則本』はこの本の簡易版である。スポンティーニ《オランピア》においてモンガン (Mongin) の手によりオフィクレイドが初めて用いられたことが記載されている。調の練習としては、ソロのエチュードとデュオを調毎に1対として並べる構成が特徴的で、続く3楽章形式の6つのデュオ、オフィクレイドと伴奏用のバスの二声のエチュード、3曲の主題と変奏曲は、教育用というよりはむしろ演奏会用である。

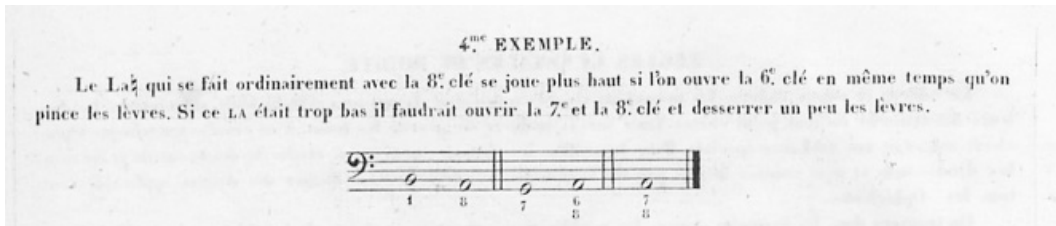
3-3-3 ベール、コシヌス『オフィクレイド完全教則本』(1837)

作曲家、クラリネット奏者、バスーン奏者であったフレデリック・ベール (Frédéric Berr, 1794-1838) は、軍楽学校設立時の学長も務めている。ヴィクトル・コシヌスとの共著となっているこの教則

本は、表紙に軍楽学校のオフィクレイドのクラスでこの教則本を使用していることが記されている。前書きにおいて、アラリによるオフィクレイド開発の経緯に詳しく触れているほか、当時既に様々な調のオフィクレイドが開発されていることにも言及し、それによると、アルトの楽器としてF管とEb管、バスとしてC管とBb管、更にコントラバスとしてF管とEb管が存在していた。マウスピースについて、後の多くの教則本では円錐型のものを例示しているが、ここではカップ型のものが挙げられ、金属製の他に木製や象牙製のものがあることにも触れている。運指表では、既に第10、11のキイについて言及され、また、楽器の保全、掃除の方法についても詳しい記述がみられる。

教則本は2部に分けられており、第1部で音楽の基礎的能力を十分に修得してから第2部に臨むよう但し書きがされている。特徴的なのは、詳細な替指の規則や下行音型の練習など、オフィクレイドに特化した練習が多くみられることである。第2部は主に装飾音についての練習が掲載され、巻末には15のメロディが附されている。

譜例1 替え指の規則の一例（ペール、コシヌス 1837：第1巻 p.8）



3-3-4 システルマン『新しいオフィクレイド教則本』（1841）

標準的な構成の教則本で、使用可能音域（B1-G4）、推奨音域（B2-G4）、両者ともに従来の音域より狭い音域とされ、全体的にも難易度が低く設定されている。

3-3-5 コシヌス『バス・オフィクレイドのためのソルフェージュ・メトード』（1843）

1837年の『オフィクレイド完全教則本』に続くコシヌスの2冊目の教則本で、当時軍楽学校学長であったミケーレ・カラファ（Michele Carafa, 1787-1872）に献呈され、前教則本同様軍楽学校の教材として用いられた。2冊に分冊されており、それぞれ99ページ、92ページの大著である。

冒頭の楽典の説明の後、バス・オフィクレイド、アルト・オフィクレイドに加えて、ピストン・オフィクレイド（Ophicleide à 3 piston）、ボンバルドン（Bombardon）についても言及がされている¹⁹。バス・オフィクレイドについてはオーケストラではC管、軍楽ではBb管が適正であること、その性質上バスのパートを充てがうべきで、バスーンのような中音域での使用は適切でないと主張している（ただしオフィクレイドのソロを禁止すべきとまで言うつもりはないが、と添えてある）。アルト・オフィクレイドについては当時既に使われていないことが記され、当時新たに普及してきたピストン機構を持つ低音楽器についても否定的である。この後、マウスピースや身体のポジション、楽器の構え方、マウスピースへの唇の当て方、呼吸、音の出し方など、基礎的な奏法について、網羅的に課題が配置されている。

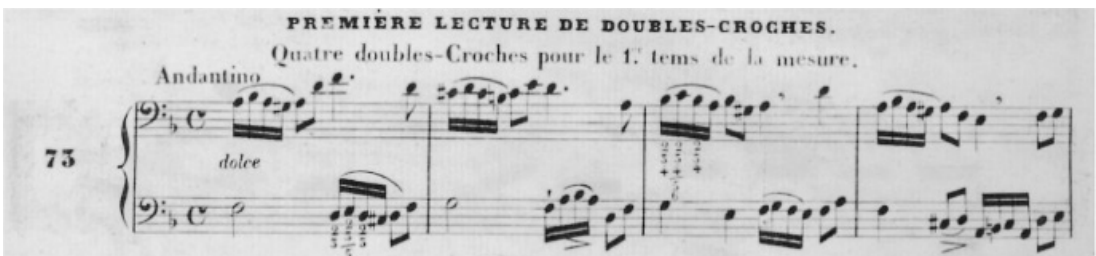
五

特徴的なのは「ソルフェージュ・メトード」と名付けられているように、ソルフェージュと楽器の演奏能力を同時に修得できるよう編集されていることである。教本は最初にロングトーンから始まり、長調や短調の音程関係を学びながら運指を覚え、休符や跳躍、より複雑な音階やアルペジオへと順次移行していく。また、単純な音階の上行、下行のような練習にも下声部が付け加えられ、修得初期から指導者の伴奏によるレッスンを留意されている。例えば譜例2では生徒は上声部のハ長調の音階を演奏し、指導者は下声部を演奏することで、単調な練習に和声感やアンサンブルの要素を付け加えている。ここから進んだ課程の譜例3では、事前に16分音符の説明があった後、それを用いた二重奏が置かれている（ここではどちらが生徒、指導者でも良いよう書かれているように見受けられる）。最終課程である第2巻の最後には32分音符を含む非常にテクニカルなデュオが置かれている（譜例4）。

譜例2 ハ長調の音階練習（コシヌス 1843：第1巻 p.14）



譜例3 16分音符の練習（コシヌス 1843：第1巻 p.80 部分）



譜例 4 32分音符を含む二重奏（コシヌス 1843：第2巻 p.89 部分）



3-3-6 ガルニエ『ピストン、またはシリンダーのオフィクレイドのための初級教則本』（1844）

前述のコシヌスの教則本と同時期に、ピストン・オフィクレイドのために書かれた教則本である。こちらの序文では、トランペットやホルネットにおいて成功したピストンやシリンダーの機構が、続いてビューグルやホルン、オフィクレイド、トロンボーンに応用され、その長所が議論の余地のないものであると、コシヌスとは逆の立場で主張している。教則本としては通常の構成で、題名が示すとおり初歩的な修得を目的としている。

3-3-7 プロジャン『単旋聖歌伴奏のためのオフィクレイド完全教則本』（1846）

リヨンのサン＝フランソワ＝ド＝サル教会のオフィクレイド奏者であった、クロード・フィリップ・プロジャン（Claude Philippe Projean）による単旋聖歌伴奏に特化した教則本。従来セルパンで行われていた聖歌の伴奏が、この時期オフィクレイドに置き換わっている状況が窺える。プロジャンは、前文とそれに続く「教会におけるオフィクレイドの有用性」において、移調の技術の必要性和、過度なカデンツァや装飾を控える事を主張している。テクニックの修得という点から、教則本の構成は一般的であるものの、全て四線譜で記譜されている事、後半に移調の練習が詳細に設けられている事、巻末ではミサの主要な部分の聖歌が3本のオフィクレイド用に編曲されていることが特徴的である。

譜例5 3本のオフィクレイドのための聖歌編曲 (プロジャン 1846 : p. 20 部分)

CHANTS A TROIS PARTIES
DU KYRIE,
Pour les très-grands solennels.

1^{er} TON. — Ré mineur.
Il faut le jouer comme il est écrit.

DESSUS
Ky-ri-e e- e- e- e- e- le- i- son.
Trois fois.

Ténor.
Ky-ri-e e- e- e- e- e- le- i- son.
Trois fois.

Basse.
Ky-ri-e e- e- e- e- e- le- i- son.
Trois fois.

3-3-8 ヴォバロン『バス・オフィクレイドのための新しい教則本』(1846)

フェリックス・ヴォバロン (Félix Vobaron) はソーミュールの騎兵学校の音楽監督であった。標準的な構成のこの教則本は2巻に分かれているが、第1巻の巻末に3本および4本ピストンのサクソルンの運指表と、予備的な練習が添えられ、運指を理解した後に前のページに戻って同じ教材が使えるように配慮されている。

3-3-9 ギルポー『オフィクレイド初級教則本』(1874)

この教則本が出版された時代には既にサクソルンが重用されていることが窺え、楽器の説明の項でギルポーは次のように記している。

……最近では(オフィクレイドの)使用がやや軽視され、3もしくは4本ピストンのサクソルンに取って代わられている。後者の楽器も非常に有用であることに異論はないが、私たちは両方を使うべきと考えており、いくら編成が整っているオーケストラでも、豊かな音色を持ちすぎることはないだろう。(guilbaut 1874: 6)

八 3-3-10 ボツシェ『9、10、11 キイのBb管オフィクレイド教則本』(1875)

吹奏楽合奏のための総合教則本 (Méthode générale d'ensemble) からの分冊で、それゆえにC管ではなくBb管が指定されていると考えられる。全くの初心者が最低3ヶ月で吹奏楽器の演奏法を修得することが目的となっており、21回の楽典の講座の後に添えられた61のエチュードは、個人練習として用いられる他に、合奏練習においてはそれぞれの楽器のパート譜にもなるように工夫されている。

4 まとめ

計 20 冊の教則本を比較した結果、現在オフィクレイドの修得に当たって最適な教則本としてはコシヌスの『ソルフェージュ・メソッド』が第一に考えられる。その根拠は前述したように、様々なテクニックを網羅的に扱っている点と、フィンガリングについて細かい言及がなされている点で、初心者のみならず、特に他の金管楽器を修得しているものにとって、オフィクレイド特有の問題を解決するのに役立つからである。この教則本は基本的に二声で書かれているため、併用する教本としてペール、コシヌスの『オフィクレイド完全教則本』のソロのエチュードを使用し、もしデュオが可能な環境であれば、コルネット『アルトとバスのオフィクレイド教則本』の後半部分を追加することも有用であろう。また、オフィクレイドのもう一つの側面、単旋聖歌の伴奏については、日本でそのような機会を得ることは簡単ではないが、その実践の一端を知り、特に四線譜に習熟すると言った点からはプロジャン『単旋聖歌のためのオフィクレイド完全教則本』も重要な文献と言えるだろう。ただ、今回扱った教則本は 19 世紀フランスの極めて限定されたスタイルであるため、現在使用されている他の管楽器の教則本、エチュードを組み合わせる楽器上、演奏上の問題点を様々な角度から検証することは重要である。また更にペルリオーズ、メンデルスゾーン、ワーグナー等の管弦楽曲におけるオフィクレイドのオーケストラ・スタディを編むことも今後必要となるであろう。

注

- 1 綴りとしては ophicléide、ophicléide、ophycléide 等がみられる。
- 2 国際楽譜ライブラリープロジェクト
<https://imslp.org> (2020 年 8 月 20 日閲覧)
- 3 フランス国立図書館 (BnF Gallica)
<https://gallica.bnf.fr> (2020 年 8 月 20 日閲覧)
- 4 Morley-Pegge, Reginald. 2001. "Serpent." In *Grove Music Online*.
<https://doi.org/10.1093/gmo/9781561592630.article.25473>
- 5 Dudgeon, Ralph T. 2001. "Keyed Bugle." In *Grove Music Online*.
<https://doi.org/10.1093/gmo/9781561592630.article.14949>
- 6 Ibid.
- 7 O'Loughlin, Niall. 2001. "Halary." In *Grove Music Online*.
<https://doi.org/10.1093/gmo/9781561592630.article.12203>
- 8 Morley-Pegge, Reginald. 2001. "Ophicleide." In *Grove Music Online*.
<https://doi.org/10.1093/gmo/9781561592630.article.40954>
- 9 Cornette, Victor. 1835. *Méthode d'ophycléide alto et basse*. Paris: Louis et Münchs. 1.
- 10 Weston, Stephen J. 2001. "Hughes, Samuel." In *Grove Music Online*.
<https://doi.org/10.1093/gmo/9781561592630.article.49083>
- 11 Joseph M. Lewis Jr. 2015. *The Development of Civil War Brass Band Instruments into Modern-Day Brass Band Instruments with a Related Teaching Unit For A High School General Music Course*. Ohio: Bowling Green State University. 19-21.
- 12 Dickson, Jean. 2010. "Orquesta Típica." In *Grove Music Online*.
<https://doi.org/10.1093/gmo/9781561592630.article.A2085469>

- 13 “Gymnase musical militaire.” In *Wikipédia*.
https://fr.m.wikipedia.org/wiki/Gymnase_musical_militaire (2020年8月20日閲覧)
- 14 Planque. 1837. *Agenda musical*, Paris: librairie musicale E. Duverget. 58-60.
- 15 Bouzard, Thierry. 2019. *L'orchestre militaire français*, Paris: Éditions Feuilles. 125.
- 16 フランス国立図書館蔵の多くの教則本は出版年は記載されておらず、表紙に別途年号の印が押されている。
蔵書のデータではこれを出版年としていることから、ここではそれに倣った。
- 17 Berr, Frédéric and Caussin, Victor. 1837. *Méthode complète d'ophicléide*. Paris: J. Meissonnier. i.
- 18 Cornette, Victor. 1865. *Méthode d'ophicléide*. Paris: Richault. 3.
- 19 Caussin, Victor. 1843. *Solfège-méthode pour l'ophicléide basse*. Paris: J. Meissonnier. vol. 1, 5-6.

参考文献

- Lapie, Raymond. 2009. Caussin, “Un Virtuose de l’Ophicléide sous la Monarchie de Juillet.” *Larigot*, no. 43: 4-10.
Lejeune, Jérôme. 2015. “The Virtuoso ophicleide.” Liner notes for *The Virtuoso ophicleide*, 6-16. RIC-362.

参照楽譜

- Berr, Frédéric and Caussin, Victor. 1837. *Méthode complète d'ophicléide*. Paris: J. Meissonnier. 74 p.
<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k1169820c> (2020年8月27日閲覧)
- Blancheteau, A. 1864. *Petite méthode d'ophicléide*. Paris: Margueritat. 44 p.
<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b525026617> (2020年8月27日閲覧)
- Boscher, A. 1875. *Méthode d'ophicléide en si bémol, à 9, 10 et 11 clefs*. Paris: V. David. 26 p.
<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b52502402f> (2020年8月27日閲覧)
- Cam, Ebrem, Abraham. 1868. *Méthode pour l'ophicléide basse & pour l'ophicléide alto*. Paris: Richault. 40 p.
<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k1172753h> (2020年8月27日閲覧)
- Caussin, Victor. 1843. *Solfège-méthode pour l'ophicléide basse*. Paris: J. Meissonnier. 2 fasc. vol. 1, 99 p. vol. 2, 92 p.
Numéro 1 : <https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k9762375j> (2020年8月27日閲覧)
Numéro 2 : <https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k97623744> (2020年8月27日閲覧)
- Clodomir, Pierre François. 1866. *Méthode élémentaire pour ophicléide*. Paris: Alphonse Leduc. 36 p.
<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b52502448s> (2020年8月27日閲覧)
- Cornette, Victor. 1835. *Méthode d'ophicléide alto et basse*. Paris: Louis et Münchs. 158 p.
<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b525022536> (2020年8月27日閲覧)
- Cornette, Victor. 1865. *Méthode d'ophicléide*. Paris: Richault. 34 p.
<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k1172754x> (2020年8月27日閲覧)
- Franck, L. 1843. *Méthode d'ophicléide*. Paris: J. Meissonnier. 24 p.
<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b525024512> (2020年8月27日閲覧)
- Garnier, Th. 1844. *Méthode élémentaire et facile d'ophicléide à pistons ou cylindres*. Paris: Schonenberger. 76 p.
<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b525024190> (2020年8月27日閲覧)
- Gobert, Antoine François. 1825 ca. *Méthode de trompette d'ordonnance, trompette à clefs, alto ophicleide et ophicleide basse*. Paris: Halary. 27 p.
<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k11689316> (2020年8月27日閲覧)
- Guibaut, E. 1874. *Méthode très facile pour ophicléide*. Paris: E. Gérard et Cie. 32 p.
<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b525024245> (2020年8月27日閲覧)
- Héral, A. n.d. *Méthode pour ophicléide: à neuf, dix et onze clés*. Paris: Alfred Ikkelmaer. 24 p.

- <https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k11755382> (2020年8月27日閲覧)
- Moreau, D. and Carnaud, Félix. 1869. *Méthode pour l'ophicléide*. Paris: Carnaud. 20 p.
<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b52502459n> (2020年8月27日閲覧)
- Ploosen, Henri Chulliot de. 1855. *Nouvelle méthode d'ophicléide*. Paris: Joly. 35 p.
<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b52502651t> (2020年8月27日閲覧)
- Projean, Claude Philippe. 1846. *Méthode complète d'ophicléide pour l'accompagnement du plain-chant*. Lyon: Dubois et Projean, J. B. Pélagaud et Cie. 55 p.
<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b52502635s> (2020年8月27日閲覧)
- Schultz, Nicomède. 1842. *Nouvelle méthode progressive pour ophicléide*. Paris: tous les editeurs de musique, Lyon: Benacci et Peschie. 41 p.
<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b525026528> (2020年8月27日閲覧)
- Sistermann. 1841. *Nouvelle méthode d'ophicléide*. Paris: Joly. 29 p.
<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b525026473> (2020年8月27日閲覧)
- Steiger, J. B. n.d. *Méthode élémentaire et graduée d'ophicléide*. Paris: Schonenberger. 80 p.
<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k9752406c> (2020年8月27日閲覧)
- Vobaron, Félix. 1846. *Nouvelle méthode d'ophicléide basse*. Paris: Joly. 94 p.
<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b525022519> (2020年8月27日閲覧)